

放送人の会

No・43
2009・11.13

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階
Tel&fax 03-3221-0019 E-mail info@hosojin.com
代表幹事 今野勉 編集担当 伊藤雅浩、鈴木典之、松尾羊一

ナシヨナリズムを越えられるか

代表幹事 今野 勉

ことしの日韓中テレビ制作者フォーラム・仁川大会で、3か国からの出品番組がすべて上映されたあと、常任組織委員長の鄭秀雄さんが制作した関妃（みんび、韓国では明成皇后）暗殺事件を題材にしたドキュメンタリーのダイジェスト版が参考作品として上映された。

関妃暗殺事件とは、明治期、熊本県出身の新聞人らを主犯とする李王朝明成皇后暗殺事件である。

日本と韓国の間で起きたこの難しい歴史的事件に鄭さんが取り組んだのは10年以上も前のことだった。鄭さんは、熊本に、ひとり、カメラを手に15回も訪れて、暗殺者の子孫に会い、地元の歴史研究者に会って、2時間ほどの第1次編集版を完成させたのは、5年ほど前のことである。熊本の暗殺者の子孫が、韓国を訪れて明成皇后の墓に詣でて謝罪し、明成皇后の子孫と会って許しを乞う経緯が記録されていた。

第1次編集版完成のすぐあと、放送人の会と放送番組センター共催の「放送人の世界」で、鄭さんを招いて鄭さんの主要な作品を上映した。関妃暗殺のドキュメンタリーはその中の1本だった。

インタビュ役をつとめた私は、鄭さんに次のような感想を述べた。国粋主義者である熊本の暗殺者た

ちは、一方で、朝鮮文化を愛し朝鮮に住んで新聞を発行していたジャーナリストでもあった。彼らがなぜ関妃を暗殺しようとしたのかという状況が説明しきれないないので、このままでは、韓国の人たちは、乱暴な日本人が弱い王妃を殺したというメッセージとしか受け取らないのではないか。関妃暗殺事件は、ロシアと清国と日本という3大強国の朝鮮半島をめぐる暗闘の中で起こったことだ。そうした国際政治状況が背景にあったことを知らなければ、韓国の人たちは単に被害者たる朝鮮と加害者たる日本という認識にとどまってしまわないか。

仁川大会で上映されたのは、当時の国際状況を織り込んだ最新編集版だった。明成皇后は、清と日本に對抗するために、南下政策をとっていたロシアを味方につけようと暗躍していた。それに怒った熊本県出身の新聞人たちが自ら刀を執って暗殺に走った、という解説が付加されていた。

フォーラムの最終日、私は鄭秀雄さんに言った。

今回のフォーラムで私にとっていちばんインパクトがあったのは、関妃暗殺のドキュメンタリーが上映されたことであつた。フォーラム創設

のそもそもの意味は、日韓、韓中、中日の間に横たわるこうした問題に正面から立ち向かおう、できれば共同制作しよう、というところにもあつたのではないか。3か国それぞれ別の国からの番組を見ることは、それぞれの国の「今」が見えて、それは有意義ではあるけれど、今回の鄭作品のような番組が参考上映されるのも大きな意味をもつのではないかと。

その言葉はとても嬉しい、と鄭さんは言った。鄭さんは、フォーラム創設者のひとりである。第1回のフォーラムは、日韓2か国の制作者たちが、釜山と下関の間の連絡フェリー船上で行われた。2回目は対馬で行われた。その様子を私は、鄭さんから何度も聞かされていた。船上での熱く激しい論争、対馬での両国参加者が車座になつての対論。ナシヨナリズムのぶつかり合いとナシヨナリズムを越えようという志が両者に共有されていた、と私は推し測つた。そしてフォーラム最終日、私は、日韓中3か国の中から1本を選ぶ投票をするにあたって、自らのナシヨナリズムを問うことになった。国を越えて、純粋にひとりの制作者として純粋に個々の作品に向かいあつて1票を投ずることができるだろうか、と。

ナシヨナリズムを越えることは難しいが、テレビ制作者フォーラムの真の意義はそこにある、と思う。

日韓中テレビ制作者フォーラム 参加作品選奨結果

グランプリ

「青春の主人公は誰なのか」(中国)



最優秀賞

「水の旅」(韓国)

「風のガーデン」(日本)

優秀賞

「発見!人間の力」(日本)

「校庭芝生化キヤンペーン」

「お買い物」(日本)

「ネットカフェ難民」(日本)

景

「見えないホームレス急増の背景」

インチョン賞

「私には大事な夜」(韓国)

「お正月」(中国)

「誰でも良かった犯罪」(韓国)

「旅館」(中国)

「ソウルには愛いっぱい」(韓国)

「道の上で」(中国)

日韓中テレビ制作者フォーラム 仁川大会報告

長沼士朗

今年で9回目を迎える日韓中テレビ制作者フォーラムは、10月の14日から4日間、韓国の仁川市で開かれた。

仁川はソウルから40キロほど西にある、人口270万人ほどの国際港湾都市で、市の南部の埋立地には高層ビルやホテルなどが次々と建てられ、今盛んに開発が進められている。

今回のフォーラムの会場と宿舍もこの開発地域の一角にあり、特に会場のコンベンションセンターは鋸型の屋根が三つ連なる印象的な建物で、200人ほどが入れる大会議室に、スクリーンや同時通訳の設備なども完備した立派な国際会議場が用意されていた。

大会の参加者は、韓国の放送人が4日間を通じて延べ100人ほど、これに中国から23名、日本から33名が参加し、連日80名から90名が一緒に作品を鑑賞し、お互いに意見を交換し合った。

この作品鑑賞と討論については、まずまず適当な時間が確保されていたし、特に同時通訳は、例年と比べても非常にスムーズで分かり安かった。

一時は韓国側の事情で開催を危ぶむ声も聞かれた仁川大会であったが、全体としてはよくまとまった大会という印象が強く、金徳在大会執行委員長を始め、韓国側執行委員の方々の労に対して深く敬意を表したいと思う。

フォーラムのメインとなる作品鑑賞については、三国からそれぞれ、「都市と人

間」をテーマにした作品3本と、自由作品1本の計4本が出品されたが、さすがに各国で選ばれてきた作品だけに、どれも一定の水準に達した密度の濃い作品ばかりであった。

昨年の福岡大会から始まった、参加者の投票を考慮に入れた作品選奨では、別表の通り、中国の「青春の主人公は誰なのか」(24本シリーズの第1回)がグランプリを受賞した。

この作品は改革開放後の中国の若者たちの姿を生き生きと捉えている点が評価されたが、優秀賞を受賞した日本の作品4本も、それぞれが力作揃いで会場の進行を盛り上げた。

特に日本海テレビの「校庭芝生化キヤンペーン」は、テレビ的な番組という共感だけでなく、韓国や中国の参加者に自国でも取り上げてみたい問題として関心を集めた。

またフジテレビの「風のガーデン」は、人間の生と死を見つめた作品のテーマが、韓国や中国の参加者にも深い感銘を与えた。

制作担当の中村敏夫さんや宮本理江子さんから、撮影を始める前に全11話のシナリオが出来上がっていたことや、演出も全話を宮本さん一人で担当したことなどが報告されたが、おそらくそうしたゆとりのある制作条件が、この作品の質を保証する一つの要素になっていたと思われる。

日程2日目の夜は、仁川港の夕食を食べながらの船上ツアー、3日目の昼は、昼食を兼ねて今仁川市で開かれている「世界都市博覧会」の見学が行われ、参加者に一層くつろいだ雰囲気を与えてく

れた。中でも船上ツアーの間近で打ち上げられた花火は、特に美しかった。

最終日に行われた総合討論の場では、大会の総括と今後の課題が話し合われたが、終りに、パネリストや会場から出された意見のうち特に印象に残ったいくつかまとめておきたい。

まず参加作品のテーマについて、今年の「都市と人間」は少し漠然としており、来年はもっと早い時期に、明確な内容のテーマを決めて作品選びをするべきだという意見が出された。

それから今回中国からは、作品制作者の参加がなかったが、このフォーラムはテレビ制作者の大会であり、作品の制作者はぜひ参加すべきだという強い意見が出された。そしてこれは毎年の課題であるが、今回も制作者同士がもう少し小さな部屋で身近に話し合える時間がほしいという声が開かれた。限られた時間の中で難しい問題だが、これからもぜひ工夫していきたい課題の一つのように思われる。

もう一つ優秀作品の投票について、今回は三国の同数の参加者が、良いと思う作品を一本づつ選ぶという方法がとられたが、ともするとこの方法は、三国の競走意識を刺激するようなところがあり、日韓中の放送人が一体となって優秀作品を選ぶというフォーラム本来の趣旨からは外れているような印象を受けた。

来年は投票による選奨も3年目を迎えることになり、そろそろ主旨にあった投票のやり方を規約としてまとめてもいい時期が来ているように思う。

仁川港の花火の中で

大山 勝美

「苦悩の韓国」「高揚の中国」「充実の日本」。第9回日韓中テレビ制作者フォーラム仁川大会の私なりの総括である。

個人的な事情で、羽田・金浦空港ルートを選んだ。15時半の空港到着時に、プラカードを持ったスタッフが待っているとのことだったが、一人取り残された感じで、1時間経つても、それらしい人物は現れない。国際用携帯電話で鄭委員長に電話を入れるが、ラインデッド。ホテル・フロントも、片言英語では通じない。

韓国のタクシードライバーが3人近寄ってきた。「どうしました？」。達者な日本語だ。事情を話すと、あちこち連絡してくれて、ようやく長沼さんがつかまった。「：そんな筈はないんですが：いずれにせよ、開会式直後の挨拶は今野さんに代わってもらいます。そうしてくださいと返事して、タクシードで行こうと値段の交渉に入った。3人が競い合う。一番安いのが4万ウォン。よしそうしよう、と腰をあげたとき、「オオヤマさんですか？」と、たどたどしい日本語が背中からかかってきた。

中年婦人が心細そうな眼でみつめている。ボランティアの通訳スタッフであった。隣に日本語の話せない青年が控えている。車持参のボランティアと後で判った。仁川空港で日本からの客をつかまえて、金浦に迎えにこる予定が、相手と接触できずに遅れたとのこと。

額に薄く光る汗をみて、私は黙るしかなかった。恨めしそうなドライバーたちが

に謝り、ヘアマチュア・スタッフが多いよ
うだが、大丈夫かなと大会運営を危ぶみ
ながら車に乗り込んだ。

主催者の韓国PD連合会が、資金集めに苦勞していると鄭委員長から聞いていた。李明博大統領になつてから、韓国の放送局KBS、MBCの社長の交代があり、社会問題を意識的に告発する番組「PD手帳」の担当者が解任された。いずれも反政権とにらまれたからだという。

空気に敏感な広告業界も腰がひけ、援助を約束した企業もおりたりで、資金が思うように集まらない。そんな事情は了解して「実質本位で結構です」と意向を伝えての日本参加であった。

ところが大きな会場もホテルも新開拓地にオープンして間もないとのことで、見かけは立派なものである。たしかに関係スタッフは少なめだ。会場にも国際会議の運営にも不慣れの様子で、日中間の通訳は用意されていなくて戸惑った。

ただ、同時通訳はきわめて優秀で助かった。大会テーマの「都市と人間」の基調発表者金さんは、これからの都市計画には「生命」「文化」「公共」の要素が重要と訴えて説得力があった。

韓国からは現場のPDの姿が少なく、ドラマの参加もなかった。ドキュメンタリー3本は、水中の生態を長期取材したもの、古いソウルの街を撮ったもの、貧しい施設で起こった無差別殺人事件の残された犠牲者遺族の辛い日々を追ったもの、と立ち止まって「都市化」の影の部分をみつめようとする姿勢が貫かれていたようだ。

それに比べて建国60年の中国は威勢がよかった。長江の川岸に並んで経営す

る2軒のライバル旅館の春秋を長期取材したドキュメンタリーは、殺人事件まで起こる劇的なもの。ドラマ「青春の主人公は誰なのか」は、大都会の若ものの生態をしゃれたセンスでとらえていた。現在の日・韓の青春ドラマにあつたらんと未来を信じて明るく青春を謳歌している。だが、どこか背のびして先発先進国なみの都市生活者の描写にとめていく感じはいなめなかった。

中国の参加者の特徴は、映像関連の投資会社のスタッフが多かったことだ。逆に、番組の直接関係者は少なかつたので、内容の質疑応答は表面的に終わった。

日本の参加番組は、いずれも堂々として個性的、見ごたえがあった。しかも主要な番組関係者は全員顔を揃えている。視聴が終わって、担当者の番組企画意図から制作の実態までを丁寧に熱心に説明していた。韓・中両国から専門的、技術的な質問が集中し、予定の時間を過ぎ、休憩タイムに入っても、日本の制作者たちのまわりを、質問者がとりかこんでいた。

日本の番組とスタッフへの賛辞と敬意は、参加者全員が無記名でベスト1に投票する選考で、日本の参加作品がすべて上位入賞という結果に現れていた。

大会2日目の夜、クルーズ船で仁川の新しい橋を一周する宴が催された。海岸を埋め立てた人口70万の商工業の新興都市づくりを目ざす仁川は、いま中国にひけをとらない高層ビル建設ラッシュである。そんな仁川市からのプレゼントの船上晩餐会は音楽や外人ショーのあと華やかな花火の打ち上げでしめくくった。

趣向に富んだ花火の先端は消えかか

ながら次々に頭上におしよせてくる。歓声と花火の打ち上げ音に囲まれながら、来年の蘇州につづく日本大会をどうする、と問いかけられているようであった。

大会雑感

河野 尚行

見渡す限りの平坦の地に中層・高層ビルが林立する。しかもその総てが只今建設中だ。まるでCGの世界に迷い込んだような人間臭のない街が、仁川郊外の干潟埋立地に広がる。その完成したばかりの国際会議場で日・韓・中TV制作者フォーラムが開かれた。

テーマ「都市と人間」にふさわしい会場といえよう。今回紹介された12本の番組のほとんどは、古い世界の残存と新しい世界の葛藤を扱ったものだ。中国のドキュメンタリー2本には、その切り口、演出面の作為、制作意図に注目が集中したが、巨大ダム開発と移転家族の運命、それに環境問題をテーマにした作品が参加したこと自体に意義を感じる。「制作現場に近い人を参加させよ」という強いメッセージが中国側に送られた。社会の葛藤と矛盾点を告発する日本、韓国のドキュメンタリーを中国側がどう感じ取ったか、興味は尽きない。

会議で留守中、BS特集で、テムジンが制作の中心を荷った「民衆が語る中国」の6回シリーズが放映された。それを録画で見、改めてこの70年間、中国民衆が巻き込まれた歴史変動の大きさ、その回数多さを痛感した。その強烈さは韓

国・日本の比ではない。

民衆を解放する力と民衆を統治する力を合わせ持つ放送文化・・・制作者が国を越えて映像表現を話し合い、高め合うことが、どのような意味と広がりを持つていくのか。10年目を迎える日・韓・中TV制作者フォーラムを、今後、周辺諸国をも巻き込んで、どう受け継いで行くか。財政問題を含め難問が山積しているが、悩むにじゅうぶん値する課題が残されている。

「校庭芝生化」を携えて

福浜 隆宏

エリア人口130万人(総人口の1%)というローカル局からの唯一の参加、しかも『校庭芝生化』という地味なテーマが韓国・中国側にどう映るのか、不安を一杯に抱えての訪韓だった。

ところが蓋を開けると予想以上の反応で、上映後に質問や感想が相次ぎ、「我が国でも広めたい」との声が両国の参加者から聞かれた事は、日本生まれの新しい文化を北東アジア全体で共有する第一歩につながったのではないか。その事がフォーラムの開催趣旨にわずかも寄与したとすれば、日本の代表作のひとつに選定して頂いた皆様のご苦勞に幾ばくか応えられたのではないか。自画自賛に聞こえるかも知れないが、訪韓まで不安が心を支配していたのでご容赦願いたい。

改めて申すまでもないが、政権は民主中心に移行し、オバマ大統領の非核化表明など、我々は紛れもなく時代の大きな

転換点に『遭遇』している。その意を強くしたのも、当フォーラムで日本の放送ジャーナリズムの礎を築いて来られたお歴々の皆様と直接言葉を交わせたからこそである。

果たしてテレビは今のままで良いのか。あえて『遭遇』という言葉を使ったのは、時代の最先端を走るべきテレビが従来型を踏襲したままで、変革の流れに置き去りの『傍観者』と化しているのではないのかという、危機感からである。

我が家には中学3年の長女を筆頭に、来年少学校という長男まで3人の子どもがいるが、何でもはつきり言い過ぎると先生からよく指摘される中学1年生の二女が訪韓直前に口を開いた。

「お父さん、テレビつまんないわ。」

ちようど10月番組改編のタイミング。どのチャンネルを回しても長時間バラエティーだった事が、ドラマ大好き二女にとっては腹に据えかねたらしい。

『そのテレビのお陰で3度の飯を食べさせてもらっているのにな』と返答に窮している。「そんな事ないで、楽しいわ。」とお笑い大好き長女が絶妙のフォローを入れてくれたのだが二女は2階に上がってしまった。大半のお宅が我が家と同じだとは思えないのだが、テレビが飽きられてきたのか。

経済が低迷期を抜け出せずにいる中、ある程度結果が見えるものを選択するのは常套だろう。ただ不安に背を向けていても変革は起こり得ないのも必然である。毎年、国内各番組コンクールで優秀作が表彰されるが、どの程度の視聴者がその番組を目にしたのか。ふと今回のフォーラムで上映作を見なが

ら気になった事である。(日本海テレビ報道制作部 次長)

交流・質疑

中町 綾子

まず、成田に着いて「今年もよろしくお願ひします!」そして、会場・仁川コンベンシアに着いて、「We met last year! How are you?」。(すみません、インチキな英語です)。ともかくにも再会。このフォーラム、日中韓の交流をこえて、人と人との交流なのだなぁと、しみじみです。

さて、今回のフォーラムでは、方法論をめぐる質疑が飛び交いました。

「風のガーデン」(フジテレビ)の音楽演出について。韓国の質問者は、音楽は緊張感を高めるために用いるのが常と思われているようでした。だから、「風のガーデン」の静かなシーンでゆったりと音楽を聞かせる表現には、戸惑いを感じたようです。「このドラマでは、音楽があることで緊張感が損なわれているのでは?」との質問でした。緊張感を超えた、人生の逡巡の時間に音楽が用いられる。そういった表現もあるんですよ! と言いたかったのですが、この答えにたどり着いたのは、帰国後のこと。うーん、残念です。

ドキュメンタリーについては、取材者と被取材者の関係についての質疑が相次ぎました。永遠のテーマです。

韓国の出品作「私には大事な夜」(KBS)、「誰でも良かった犯罪」(MBC)は、

いずれも複数の取材対象を並列的に提示するものでした。テーマの追求が弱いのではないかと、この指摘がなされました。いくつかの事例を見せることで問題提起する。韓国の出品作に共通の方法論となっていました。

中国の「旅館」(重慶電視台)、「道の上で」(広州電視台)は、テーマが象徴的な映像(情景)で伝えられていました。途方にくれて佇む村人、瑞々しい緑の中を自転車疾走する若者。詩情溢れる情景で、やや演出が過ぎるのではないかとこの指摘がなされました。

日本の「ネットカフェ難民」(日本テレビ)については、取材対象へのアプローチがどのようなであったかについて各国から質問がありました。テーマと取材対象者がダイレクトに結びついていることから生まれた質問のようです。取材の過程での取材拒否や、取材後の放送拒否にはどのように対応したかについても質問がありました。

ところで、日本の作品が上映された後に、よくなされる質問があります。「制作費はいくらでしたか」「お買い物」(HK)でもそうでした。えーっと、そこそこかかってます。たぶん、やっぱり大事なことですよね。。。そして、それは日本の作品のクオリティを認めた上での質問なんですよね。(日大教授)

都市の貧困問題

水島 宏明

初参加。今年のテーマが「都市」だけ

ら自分にお呼びがかかったと聞き、一種のシンポジウムだと思い描いていた。日頃、都市を中心にした「貧困」をドキュメンタリーのテーマにしているのが各国に広がる同様の問題を討議するものと想像していた。グローバル経済化における都市市民の貧困化は日本や米国、韓国などで共通の課題。私も前年、日弁連の調査チームと一緒に米国や韓国の「貧困」問題について聞き取り取材をした後もあった。

だが参加してみると日韓中フォーラムはシンポジウムの極端に少ない番組品評会であり、そこでは国益まで見え隠れする。それでも私にとって最大の成果は、建築家の金鎮愛博士の「都市」に関する講演だった。博士は現代都市に必要な要素として、生命、文化、そして公共性という概念を示した。これこそテレビ制作にも共通する3要素で、なかでも「公共性」は制作者が忘れがちなポイントだと反芻した。番組の公共性：世知辛い制作環境下で制作者が希求したい要素ともいえ

た。さて「都市の貧困問題」をテーマにした番組「ネットカフェ難民」を引つ提げた私には、日本版の新貧民層のねぐらがネットカフェならば韓国版の新貧民層のねぐらといえる考試院を舞台にした無差別殺人事件を追う韓国ドキュメンタリー「誰でも良かった」に心惹かれた。前年の日弁連との韓国貧困調査の際、もともとは国家試験の受験生のための木賃宿、考試院に貧困層が大量集結している実態を目の当たりにし、「もし韓国でドキュメンタリーを制作するならば考試院をテ

マに」と考えていたからだ。制作した金鍾佑ディレクターとの会話も楽しいものだった。私が通常行う社会学的なアプローチとは違い、彼は文学的あるいは運命論的にこの不条理殺人を捉えたという。方法論の違いであり、まったく「あり」の手法だ、と感心した。

日本から参加した制作者にもジャンルが違うドラマ制作者や歴史的名作のエンドロールにその名を眺めた巨匠たちの警戒に接することが出来たのは収穫だった。巨匠の一言一言に姿勢が表れ、制作者には「肥やし」になった。

全体として制作者同士が「語り合う」「議論を戦わせる」場面が少なかったのは残念だ。本音ベースの会話、知的な刺激。実際は多くなかった。番組やテーマ、手法、環境を話し合うことが国を超え、制作者の「肥やし」になる。もつと語り合わせてほしい。制作者のフォーラム（広場）なのだから。（日本テレビ）

「テレビ制作者合宿」

遠藤 理史

今回初めて日韓中TV制作者フォーラムに参加させていただきました。私は特集ドラマ「お買い物」を携えての参加でしたが、様々な意味で大変刺激的な四日間でした。

テレビ番組を評価する国際コンペティションはたくさんありますが、番組の制作者が直接質問に答えて情報交換できる会というのは稀有なのではないでしょ

うか。各国の力作を見るだけでなく、どいうやってあのカットを撮ったのか、どのくらい日数がかったのかなど突っ込んだ質問も出て、韓国中国のテレビ事情もおぼろげながらわかってきました。お互いの文化の違いに驚くことも多かったですが、それでも皆が「面白い！」という番組に意外にズレがないというのを確信でき、これからの番組作りに勇気をもらいました。

実は日本にもまだまだ見逃している力作が多いことにも気づかされました。

日本海テレビの「校庭芝生化計画」には「何かやらねば！」という気にさせられましたし、日テレの「ネットカフェ難民」の丹念な取材ぶりに感服し、フジの「風のガーデン」の素晴らしい出来には、口惜しささえ覚えました。こうした素晴らしい番組を制作された各局の皆さんと交流できたのも、今回の大きな収穫でした。

あと、日本からの参加メンバーがほかの2国に比べて平均年齢高めだなとか、なのに皆さん熱いなとか、中国の皆さんのエリート意識がえらく高いなとか、番組以外にもいろいろ勉強に(?)なることの多い旅でした。

一方、運営面では問題が散見されました。時間管理がルーズだし、パンフの名前は間違ってるし、スケジュールもしよっちゅう変更になるのに連絡が行き届かない(だから自分で積極的に情報を取りに行かないと置いていかれる)し、食事はホテルの食事や弁当でまったく韓国料理が食べられないし……まあしかし受け入れる韓国の方々だって忙しい番組制作の合間に準備しているはずで、多少の手抜きは無理ありません。

それより「これはテレビ制作者合宿なんだ」と気持ちを切り替えたら結構楽しめました。同じテレビ業界の仲間たちで、4日間こもって番組見て語り合う合宿です。

「日韓中テレビ制作者合宿」。

いやむしろタイトルをそっちに変えたほうがわかりやすいんじゃないでしょうか。

ぜひまたいい番組を作って、この合宿に参加したいと思います。

面白いフォーラム

宮本 里江子

「宮本さん、出張で韓国行かない？」プロデューサーからの誘いの中に「オイシイ出張」の匂いを嗅ぎ付けた私は、即答した。「いくいくっ！」詳細を聞かされないまま出発当日に飛行機に乗り込む。頭の中はもうチゲとキムチとエステで一杯である。

が、しかし！到着後、私にはなんの嗅覚もない事を実感。そーいやアタシの人生オイシかった試しがない。ってこんな不謹慎な態度で参加した私は連日のハードな日程を見てもどこかでさぼってやろうなどと画策しておりました。こんな不届きものをどうか皆様、お許しください。

なのに始まってみると、「面白い！」

各国の映像から見える相違点、メディアのあり方、制作者たちの思い。遠いようで近いようで、その間を気持ちが行ったり来たり。韓国の人の悲しみ方は強烈だ

なし。中国は国中が一人っ子になるろうとしてるんだー！視聴率競争に苦しむのはどこも一緒かー・・などと考えている間に、喫煙エリアで会う他国の人々との間にも遠慮がちな、でも好意的な会話が交わされ出す。

会場で言うほどではないけど、少し話してみたい。そんな話を煙草片手にするうちに顔見知りが増えていく。

他国の作品だけでなく、日本の作品もすばらしい。その方達ともいろんな話を話した。ドラマ専門でやってきた私にはドキュメンタリーの話は特に興味深く、一人で全部やる方々に驚き、憧れた。

自分の番組は上映が最後だった為、それまでに沢山の方と話し、刺激を受けた。だからなおさら自分の番組への評価が気になる。抑えた表現を意図的にやってみた番組である。通じるだろうか。もっと解りやすいの出品すればよかったかなーと弱気になるがもう遅い。

上映が終わり、討論になるとまず最初に中国の女性監督からお褒めの言葉をいただいた。嬉しい。通じた！自分の作品が異国の人々に受け入れられる事がこんなに嬉しいものだと自分でも思いもしなかった。韓国の方にも握手を求められ、喫煙所でもおおむね好評。

自分も他の作品を良いと感じた時にもっとはつきり良かったと伝えるべきだったかと反省した。

3日間の短い日程では、訊きたい事、話したい事がありすぎて、でも言葉の壁があってもどかしい思いでしたが、自分の心は確実に韓国、中国の方達に近づいた。そんなチャンスを下さったフオーラム主催者の方々から感謝しています。来年も参加できるように、面白いドラマつくらなくっちゃ・・

経済危機を乗り越えて

限部 紀生

今回の仁川大会は、各国とも世界的な経済危機の影響を受けていることを感じさせた。参加者も若干減り、番組の制作条件が厳しくなっているという発言が目立った。福岡大会で語られた国境を超えた共同制作については、韓国と中国の地方局が共同制作した番組が一本参加したが、経済危機の影響もあって大きな進展はなかった。また「都市と人間」という今回のテーマについては、日本と中国はわりに広義にとらえていたのに対して、韓国は狭義にとらえていた気がした。

選奨のグランプリは中国のドラマになったが、中国代表団のリーダー自らドキュメンタリーではまだ学ばなければならぬことが多いと語っていた。韓国は前回大会でドキュメンタリーに傑作があったのに比べて、今年は問題提起はしても掘り下げが十分でない作品が多かった。日本のドラマはメッセージ性や完成度で群を抜いていて、韓国の制作者から制作条件が恵まれていてうらやましいという声が出ていた。またドキュメンタリーでも日本の番組は徹底的な取材や問題の広げ方など一日の長があったと思う。去年の福岡大会では率直に各国のレベルの差がなくなってきたと思った。

が、今年の参加作品を見るかぎり、韓国、中国の国内の制作条件の厳しさが反映していたのだろうか。気になるところだつた。

質疑応答で各国の制作事情が分かった点もあるが、直接制作した当事者が参加していないため、満足な回答が得られなかった場合もあり、残念だった。

今年の第10回大会は中国の蘇州で開かれる。第1回大会が歴史認識の議論で紛糾したと聞くにつけ、関係者の努力でよくここまで来たものと思う。その当初に比べて今では、東アジアの国々の交流は格段に深まり、さまざまな対話が進んだ。この新しい時代背景を踏まえて、第10回大会を契機にフオーラムの参加国を増やし、別に誕生したアウオードとの関係、より一層制作者の大会にするための工夫を検討し、何よりも経済危機を乗り越えて、世界の放送文化に貢献できるような第二のスタートを切りたいものだと思う。

地方局制作スタッフに乾杯

寒河江 正

恒例の日韓中テレビ制作者フオーラム参加も私の場合、今回の仁川で5回目になる。開催地へ赴くたびに放送マンの心意気に触れ「参加して良かった」の実感をもつ。大賞でグランプリは中国の「青春の主人公は誰なのか」。現実の困難に立ち向かう3人姉妹のそれぞれの行動が、躍動感溢れる映像によって描かれており、何より洒落た番組になっていた。

最優秀作の1つ「風のガーデン」は文句なしに秀作だと思ったが、優秀作の1つ、日本海TV制作「発見！人間の力」校庭芝生化キャンペーン」はローカル局に身を置く私としては、昨年のグランプリ「やねだん」(南日本放送)の受賞と同じくらいうれしかった。人が足りない、お金が足りない…私が50年前の入社時に聞いた言葉だ。2作品には制作スタッフの熱い思いがあり、知恵がある。世論を動かす圧倒的な力があると思った。限られた時間の中、韓中制作者の作品創造過程への質問にも鋭いものが感じられ、フオーラムから学ぶ真摯な姿勢が印象に残った。

城市

伊藤 雅浩

仁川では「世界都市フェスティバル」が開催されていて、私たちはフオーラムの2日目、ミニ万博のようなフェスティバル会場を見学した。

パンフレットを見ると、韓国用にはハングルで「トシ」と書いてあると読めるが中国用には「城市」とある。現代中国語に「都市」という言葉はないわけではないが、ふつうは「城市」だそう。中国では今でも北京の数メートルの厚さの城壁をはじめ地方の小都市でも城壁をめぐらせている。

今回のフオーラムのテーマは「都市と人間」だが、この「城壁」からはじめると、都市の構造、治安、プライバシーなどいくつものテーマがあるな、と私は思った。ベルリンの壁、いろんな壁と取り組む番組を見たい。

「田舎暮らしの落とし穴」

秋山 豊寛

シベリアからやって来た寒波が日本列島を横断し、阿武隈の山地は、まだ十一月のはじめというのに初雪。五センチも積りました。

今年は紅葉が見事で、十一月中旬までは山の錦を楽しめると思っていたのに、家の周囲を彩っていた黄色のイチョウやコブシ、紅色のカエデやヌルデも一斉に散りました。

雪のあとは、晴天続き。少し掃いておこうと竹箒を持ち出したものの、大地を彩る落葉の鮮やかさに、そのままにして置きたくなりました。昨年、京都を訪れた時に大覚寺の坂口博翁僧正が「木の葉の涅槃の姿ですね、落葉は」と言っていたのを思い出したからでもあります。お坊さんというのは、うまい表現を知っていますね。

晩秋から初冬にかけてのこの時期は、椎茸栽培にかかわる作業が、私の農のある暮らしの軸になります。二年ほど寝かせておいた椀木を浸水させてハウスの中で発生させます。摂氏十度前後で、じっくり育てると肉厚の良い椎茸が育ちます。これを一月ほど天日にさらして天日干し椎茸にするわけです。阿武隈の山地は、十一月も中旬を過ぎますと、夜は氷点下になる日もあります。気温が低過ぎますと、発芽した椎茸が眠ってしまうので、夜はボイラーで加温する必要があります。ボイラーの燃料は、古い椀木や、裏山か

ら集めた木の枝です。

今年台風が暴れたので、裏山には倒木が何本かあって、燃料集めには苦勞しません。ボイラーで燃やしたあとに出る灰は、畑に戻しますから、資源の「リサイクル」という点では、かなり効率の良いリサイクルだと思っています。こうしたリサイクルが可能なのも、山の暮らしなればこそ、というわけなのですが、当然のことながら山の暮らしは、基本的に自分が身体を動かすということで維持されます。健康でなければ、すぐに困ってしまうので、「定年帰農」という言葉があるようで、「田舎暮らし」を望む人が少なくないという話を耳にします。

そこで今回は、私が経験した「田舎暮らしの落とし穴」といったことを二、三思いつくまに挙げてみます。

一つは、山の中では、テレビ（地上波のテレビ）が映らない、ないしは映り難い場所があるということ。

私の家は、山の中腹南向きに建っています。標高六百二十メートルで、空気も良く、水も良いのですが、地上波のテレビは全く受信できません。正面に標高九百七十メートルの羽山という山があり、テレビの中継局は、その羽山の更に南の矢大臣山に設置されていて、この山が九百六十四メートル。従って、羽山にさえざられて中継局からの電波は、私の家には届かないわけです。住み始めて、二年ほどは、テレビの無い暮らしでした。地上波のテレビ局に三十年位勤めていた割には、テレビの無い暮らしも、そう不便な感じではありませんでした。現在はCSのアンテナをつけて、天気予報をはじめBBBCやCNNを受信しています。

次は、医療にかかわる問題。

地方都市の病院の医師不足がようやく問題になっていきます。自公政権の永年の悪政の一つが、福祉政策。特に医療にかかわる問題ですが、私の在所でも、その影響を受けています。

町内に総合病院は無く、診療所が一つあるだけ。隣町に「公立」の総合病院はありますが、この病院が医師不足で、一昨年、夜間の受付と休日の診療「お断り」になりました。自公政権の悪政の影響と言え、郵便局も今や風前のトモシビという噂があります。政権交代で、郵便局消滅は、噂で済むかもしれませんが、まだ油断はできません。何しろ「後期高齢者医療制度はなくす」とマニフェストで宣言しながら、早々に先送りした「新政権」。来年の参院選の結果次第では、自公政権と変わらない手口で、国民に「痛み」を押し付けるかもしれない。そもそも、福祉費の削減は憲法二十五条第二項に違反しています。

最後は「過疎地」で自然が保たれていても、自然破壊の事業が「エコ」のかけ声とともにやって来る可能性。

私の家の三キロほど先に、風力発電の大型風車が十数台設置されることになって、保安林を含めて、近くの山地が切り開かれました。今年の夏は、ノスリやフクロウなど毎年声を聞かせてくれた大型の鳥たちは、姿を見せませんでした。コウモリや様々な渡り鳥たちが訪れなくなるのも時間の問題でしょう。

風力発電については、人間への悪影響をはじめ、様々な問題があるにもかかわらず、そしていわゆる「環境派」と言われる人々さえ、何故か「自然に優しいエ

『農のある暮らしへ』岩波書店より



ハウス内で椀木に育つ椎茸の生長を調べる(提供:朝日新聞社)

ネルギー」と思い込んでいるようです。しかも、税金からの補助が半分から三分の一もあるのに、「事業者」は故障が多くても「あまり損をしない」と言う噂さえある不思議な「事業」です。「エコ」を旗印に進められる様々な無駄使い事業の典型です。

過疎地の山暮らし、田舎暮らしも、ここ数年は浮世の様々な騒音から自由な暮らしでは無いのです。

懇親忘年会

日時:12月18日(金) 18時~20時

場所: un cafe (アンカフェ)

TEL.03-5469-0275
(コスモス南青山サウス棟 B2F
青山ブックセンター向かい)

会費: お一人様5,000円
(当日会場でいただきます)

恒例 当世三酔人TV問答

事務局で、横浜清文ホールは「舞台裏」のお聞き飲み会で、幹事会などの集まりで、編集委員で、折に触れお噂が流れます。言いつばなしではもったいない。てなことで落ち穂拾い拾遺の数々……

「JIN-仁」(TBS)



●原作=村上もとか/脚本=森下佳子/演出=川崎龍太郎/出演=大沢たかお、中谷美紀、綾瀬はるか、小出恵介、内野聖陽。

Y 同様、タレントや役者の顔がわからない。とにかくカット数が多すぎる。PC編集過剰で睡きすると場面が変わっている。眼が可哀想だ(笑い)

X 強いて挙げれば日曜夜の「JIN-仁」(TBS)か。タイムスリップものだが、トンカチで頭を割るとか医療技術面のスリッパは見もものだ。

Z 龍馬だって幕末から逆スリッパした男って設定の面白さ。

X いろいろあった〇九年だが、TV界に限って言えば……

Y 何と言っても鳩山政権の誕生だ。90年代に野党連立の野合政権があったが、自民党完全下野で政局観本位のニュース手法の文脈が白壊、破産したこと。

Z 政・官・財をめぐる派閥の動向という上から目線で硬派ゴシップを書きまくり、おちよくる手法の終わり。

Y Nスベが三夜連続で「証言ドキュメント・権力の興亡」を描いた。あれに尽きる。時代は変わったのだ。

Z 夜討ち朝駆けや料亭やホテルめぐりの幹事記者がデスクでパソコンにへばりつき、データ漁りによって変わった。あるデスクはマニフェスト吟味の明け暮れで面白くないとコボしていた。

X アンサンブルゲーム(旧体制)打破の平成維新の始まりなのか、小選挙区制下の不毛な政治ゲームの始まりに過ぎないのか。その見極めによって政治報道の方向性が試される。

Z だから面白い。調査報道主体のプロジェクト組織を構想してる局もあるようだ。切れ味が試されるのだ。

Y 報道局発のワイドや番組の「数字」が軒並み良い。国民は変化を求めているのだ。期待したい。

Z 国民ねえ。そもそもテレビは「国民」という言葉になじまないメディアなのだ。民衆から市民へ、大衆から新自由主義派の小衆論議の空中分解を経て奇妙な脱大衆化現象が始まっている。もしかするとそれは「国民」という言葉のカミングアウトなのかも。誤解される権利を駆使してまでも新権力である民主党をクールに監視する態度だ。

Y 政治に限らぬ。先日池袋へ行ったライバル店に對抗しようと三越が電器量販店に化けていた。ビッグカメラとヤマダだけど、テレビだってゴールデン帯は吉本TOBで様変わりだ。

Z テパ地下、一階の化粧品、二階が婦人服、紳士服ときて上階がガキ向け玩具コーナーがあって更に時計に貴金属階。そんな店内構成を安売りアイテムでパラダイム・シフトを図るのが量販店の構想だ。

X テレビ編成も全く同じだ。クイズにコント、演芸に教養というちまちまにした番組編成がミスマッチ状態に陥り、善しあしは別にいつのまにか汎パラエティ状況にシフトされて久しい。脱大衆現象の再大衆化困いこみ現象。

Y 大衆状況下でドキュメンタリーや純粋ドラマを許容してきた「テレビの青春」時代をデパート型編成とすれば、いまや量販バラエティによる商品構成に似せた編成だ。半強制の社員がアンチャン風に売り場で喚びているのが

Z 番組の細分化編成は生活時間に対応した多様な展開を前提としてきた。今その枠組みが壊れかけている。家庭と地域と職場を結びつけていた精神的紐帯に依拠してきたテレビが漂流して

いる。現状は「……のような番組」を束ねた正体不明の長時間ワイド・ゾーンに編成意思が流され右往左往しているのではないか。「吉本」と「ジャニーズ」支配はまだまだ続く。

X 政治に遅れをとってる皮肉。

Y ところでドラマって見てる?

Z 週一回連続という視聴習慣が完全に崩壊した。「一週間のご無沙汰」を待つ、待たせるといふホーミーな空間と時間配分を茶の間もテレビ局も失ってしまった。だから話題作だけを見ることにしてる。

Y おとな復権ドラマか。

X 清張生誕百年(「点と線」などのテレビ朝日)もあれば、山崎豊子で周年記念大作「不毛地帯」(フジ)。

Y 前作の「白い巨塔」に比べると数字が悪い。10パー前後だ。なぜだ。

「不毛地帯」(フジ)



●原作=山崎豊子/脚本=橋部敦子/演出=平野眞/出演=唐沢寿明、和久井映見、柳葉敏郎、小雪、天海祐希、竹野内豊。

Y 幻想の「国民」は「大きな物語」に飢えているのではないか。大きな物語に潜り込んで小さな心や感情の揺れを「共犯者」として追認する快感とでも言っておこう。

X 思い出したが、かつて唯一認められた作家に松本清張を挙げた理由を文芸評論家平野謙は「比喩的に言えば、犯人にして探偵をかねることが、人間探求を眼目とする作家たるものの有力な条件にほかならぬ」と清張小説の深層に仮説を立てた。不器用で高等小学どまりの「学歴の無いコンプレックスを土壌とした作品は、凍りつく(犯罪現場)における共犯者のリアリティーを持つ」(「松本清張60年」より)と。

共犯者が共演者の関係性を仮託し、感情移入するのが読者や視聴者なのだ。「坂の上の雲」(NHK)にしたって司馬さんは明治という「時代」に対する共犯性という誤読を恐れつつも一方で、膨大な読者(共演者)の存在を意識したアライバイ作りの大作と読める。

Z つまみ、ホームドラマやテレビドラマ、サスペンスドラマなどに分断された「小さな物語」を囲いこみ、断片した「個」もまた実は漂流している時代なのだ。「点と線」にしても、モーターリゼーション時代の出現以前に列島の移動による不在証明を農民的な定住観人生観で自足できた社会につきつけた予言の書と読みたい。何故なら、

いかにアライバイを作るか、作れるか、その集積の多少と配分によって辛うじて生きているのが組織と個の現代人だから。違いますか。

Y お説は分かりました(笑い)が、具体的な個別作品論議に入りたいたいのですが……

Z 「坂の上の雲」(NHK)も控えている。その前に城山三郎の「官僚たちの夏」(TBS)もあった。時代劇では山本周五郎、池波正太郎、藤沢周平と続いた。映画化も含め時季外れのテレビ的「国民文学論」の復活と聞いていい。この大作主義ブームって何なんだろう?

Z NHKの番宣用語で「民放ではできないドラマ」とよくいう。しかし「不毛地帯」に戻るが「官僚たちの夏」もふくめてこれらはNHKでは企画はされても放送はできそうにもない素材だろう。

X 政財界汚職がらみのネタだもの。さしきわりがあり過ぎる。生臭いのはきらいなのがNHK。

Z それらが思ったほど視聴率がとれない。考えてみると、シベリア抑留者とか自衛隊のシベリア人と制服組の確執、特需景気を奇貨として高度成長を演出した新官僚たち、これら現代史の周辺を突感として理解できる層は多分70歳以上だろうな。

Y 元教師だった知人が言うには社会科で教えるのが現代史だったという。避けて通りたい。戦後史で決定的な通史が少ないのだ。それほど歴史認識と戦後は厄介なのだ。

X 司馬遼太郎、松本清張、山崎豊子を束ねると「英国史」「フランス史」を横断したA・モロア+バルザックの分身になるそうだ。中でも司馬遼太郎は「坂の上の雲」1、2をDVD版で見たが脱帽だ。昭和「異胎」の悲劇、2・26やノモンハン、日本の破滅までの筆道を見たかった。

Y それに緒形拳、森繁が逝き、三國連太郎老い、政治家や財界の巨頭に扮する役者がいなくなった。

Z 「日本人の顔がつまらなくなった」と言ったのは和田勉だが、重厚長大型現代ドラマは挑戦に値する場だが、リスクも大きい。フジは「不毛」を2クールかけてやるそうだが、今後の展開を期待したい。

X ぼくはむしろNHKの資料ドキュ

メント群を注目している。前号の座談会でも触れたが「日本海軍 400時間」の証言」3部作などはたしかに「NHKにしかできない」分野だもの。

Z NHKは太平洋戦争開戦七〇年にあたる2011年をめざし今、戦争証言集を蓄積している。「日本海軍……」はその一例だ。そのほか戦場体験、軍政、戦中行政、戦時生活など戦時下の日本人はどうすごしていたか、膨大な戦時神史を地方NHKの手足を動員して作っていると聞いた。放送で見た番組は例えば、「ビルマ 濁流に散った敵

中突破作戦—徳島県歩兵第143連隊」「東部ニューギニア 絶望の密林戦—宇都宮歩兵第239連隊」などなど40近いドキュメンタリーを作り、現在も継続中だ。番組だけでなくデータバンク化している。

Y 師団、旅団など県単位の軍隊構成だから満州へいった静岡出身の兵隊たちの多くは硫黄島に転戦、玉砕した。地方局は地元資料を漁り、生存者を探し証言集を作る。

X 「敗者は映像をもたない」と言ったのは大島渚だが、今敗者が現代史の闇を語り始めている。NHKのプロジェクタのスケールをたしかめているところだ。そりゃそうで90歳、80歳の老人たちが口を開かねば真相は分からない。遺言として語る彼らが迫ってくる。

Y 情念優位の反戦史観をこえた戦中戦後観が今の人たちに届くかどうか。「官僚たち……」や「不毛地帯」の苦悶もそこにある。

Z 戦争を知らない靖国参拝の若造議員たちには是非みせたい。

X 話は飛ぶが「JNN50周年記念 唐招提寺1200年の謎」にしても、呪詛とアニミズムによる国家観を仏法

による国際的視野を導入した国家理念を佛の道から問い直す渡来僧鑑真・如宝の思想からみた作品だろう。ドキュメント部分の相互乗り入れ演出で損をしたが、あれだって大河ドラマのスケールをもった企画だった。惜しい。

「唐招提寺1200年の謎」(TBS系列)



●脚本=木下草介/出演=中村獅童、山本耕史、永井大、南野陽子、廣津斗、滝田栄、永島敏行、島田陽子、中村嘉輝

による国際的視野を導入した国家理念を佛の道から問い直す渡来僧鑑真・如宝の思想からみた作品だろう。ドキュメント部分の相互乗り入れ演出で損をしたが、あれだって大河ドラマのスケールをもった企画だった。惜しい。

Z 線向遺跡(奈良桜井市)も発見され、古代史邪馬台国論争の決着に火がついた。大河ドラマの企画にいいよ

X アニメの世界では成立しても大河じゃ無理。ボロをまとったホームレスみたいな風俗がウロウロする一年間は見る方もつらいのでは(笑)

Z 視聴率の観点を超えて「鬼道」呪詛とアニミズムによるヒミコ政権に日本の原点を構想するドラマだ。

X NHKは丸山真男から網野義彦へ軸足を移せ。そう言いたい?

Z 荘園制度による天皇支配説から日本創設を描く通説を、中世農民像の仮説で解放し、職人や商業、芸能の多様性をも含んだ、定住でなく漂泊の民たちの列島孤原文化像を説いたのが網野学説。坂本龍馬もいいが、近世覇道論(戦国時代)と近代入り口論(幕末)

にこだわる大河ドラマに風穴をあける。そんな編成思想が出ていい。信長・秀吉・家康とその周辺に忠臣蔵・維新前夜で占められる企画が核となってる大河史観をぶっこわせ!(笑い)と言いたい。

大河はわかりました(笑い)。さて民放キー局はどうなってるのか。昔はステーション・カラー論というのがあった。例えば日本テレビの一本は井原高忠以下のミュージカル指向で花が咲き、もう一本の読売ジャイアンツが支え、あわせて二本テレビ(笑い)。

Z 大河ドラマのTBSや報道のTBSは正直、見る影もない。

Y 昔話について、テレビの全盛期にステーション・カラーを花に譬えてかかった評論家があった。まず菊がNHK。一見地味だが盛花期が比較的長く品もある。テレビ朝日は桜。どつと咲くがパッと散る番組が多いから。TB

Sは薔薇の花。綺麗で洋風だがトゲがある。派閥争いと組合争いが絶えないフジは向日葵。鹿内太陽のほうばかり向いている。テレビ東京? 野におけ連華草だったが、いまは違う。

Z 額縁入りの番組観をひたすら守っている。「ペット大集合ほちタマ」「ガイヤの夜明け」「美の巨人たち」「開運!なんでも鑑定団」「和風総本家」などなど。

Y そういえば筑紫哲也が亡くなった今も「WBS」だもの。

Z それにシュンが終わったタレントばっかしの「いい旅・夢気分」(笑い)新聞ラ・テ表でその日の見ものを探すとわれわれのしきたりでは「番組」だからテレビ東に目がいくのは当然。ほかの民放ゴールデンはさっきも触れたように、だだっぴろいワンフロアの大

型量販店なみの編成で、買いたいものを探すのに苦労する。リモコンであちこち押してあげくにヤーマタ(笑い)Y それを言うなら量販店ではない、むしろ百円ショップだ。深夜に掘り出したものドラマを見つけたが、これがメロド・イン・コリア(笑い)

Z 笑ってるが、日韓中フォーラムで感じたが、中国の動向はあなどれない。メロド・イン・チャイナの百円ショップ・テレビの予感がする。「三国志」のスケールを見よ、だ。

X そろそろお開きにしますか。酒ももうなくなりかけてるし……(笑い)Y もうはまだなり、まだはもうなりと言うではないか。NHKはともかく民放は、「もうとまだ」を天祥にかけながら走るメディアだ。ただその歩幅が昔と比べ狭くなった。前門のデジタル後門のモバイル。番組がソフトになり、今はコンテンツと呼ばれるが、柔軟な想像力と創造力が試され、時代を遊びながら往還できるメディアって放送以外にはない。

Z 例えば爆笑問題だ。研究室にこもるアカデミズムと無手勝流で挑み遊んでる。放送だから許される柔らかいボレミークに市民参加の新しいバラエティ状況の萌芽を感じるが……オシマイ

「爆笑問題の日本の教養」(NHK)

爆笑問題の田中裕二と太田光。



(文責 会報編集部)

参加作品選奨



優秀賞「校庭芝生化キャンペーン」
日本・福浜隆宏氏



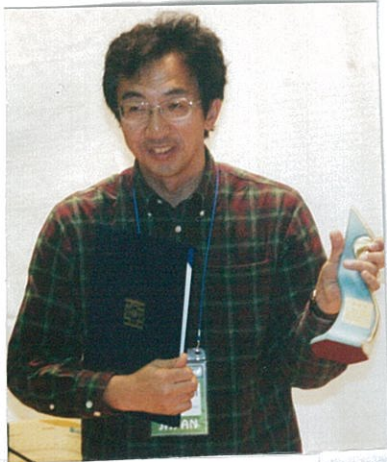
最優秀賞「風のガーデン」
日本・宮本理江子氏



最優秀賞「水の旅」
韓国・任完鎬氏



グランプリ「青春の主人公はだれなのか」



優秀賞「ネットカフェ難民」
日本・水島宏明氏



審査員・黎鳴氏



審査員・河野尚行氏



審査員・章翰成氏



優秀賞「お買い物」
日本・遠藤理史氏



旅館



お正月



ソウルには愛いっぱい
金勳爽氏



誰でもよかった犯罪
金鐘佑氏



私には大事な夜
金瑞鎬氏



ボランティア通訳



写真・左から李昌燮、彭若男、大山勝美、鄭秀雄、黎鳴、今野勉、金徳在の各氏

総合討論

作品鑑賞・質疑応答



客席からステージ奥の大画面で作品を鑑賞



喫茶コーナーでの交流



船上パーティ

挨拶する金徳在氏





仁川市内のチゲ専門店



韓国の小さな参加者



宮本理江子氏と浅野澄美氏



フォーラム会場隣の昼食



世界都市フェスタ 花展示場



仁川空港・待ち時間



フォーラム会場で
髭をそる松尾氏



尹栄仁通訳



フェスタ会場・フランスワインとパンの店

第9回 日韓中TV制作者フォーラム仁川シンポジウム



会場・仁川松島CONVENSI A (インチョン・ソンド・コンヴェンシア) の前で記念撮影



今野勉氏



金徳在氏

開会挨拶



日本・林健嗣氏
STV



韓国・李康景氏
KBS



中国・張群力氏
中央電視台

各国TV事情報告



金鎮愛氏

特別講演「人間の条件・都市の条件」



ジャン・テ・スン
博覧会本部副代表



開会式慶祝演奏 コムンゴ・ファクトリー (=琴の工場の意味の名の楽団)



宿泊したソンド・パーク・ホテル



セミナー会場の隣の晩餐会

名作の舞台裏 第24回

『お買い物』（NHK）

日時・11月8日（日）午後1時半〜

場所・情文ホール

ゲスト・久米明、渡辺美佐子（出演）、

前田司郎（脚本）、中島由貴（演出）
司会・石橋冠（放送人の会）



中島 NHK
の中で新しい
脚本家を探そ
うというプラ
ンの中で紹介
された中の一



渡辺 一軒家
を借りて撮っ
ただけで、
お料理をして
お新香ばりば
りたべて、洗

人が前田司郎さんです。ピラニアの父親とか、すつ飛んだ劇の脚本を書いていて、最初にいただいたのもロボットの話でしたが、次にいただいたのがこの台本で、おそれいりました、という感じでした。



深みを出せるのが俳優さんです。

つたつたな
い台詞になっ
たでしょう。
シンプルで
間口の広い台
詞を書いて、



石橋 カメラ
を手にしたと
きのおじいち
やんの眼光が
凄かった。A
SAなどカメ

ラの専門用語がどんどん出てくる…



久米 楽しく
やれました。
自分が好きな
カメラのこと
ならどんな
説明できる、

話さずにはいられないという楽しさです。

石橋 渋谷駅のロケは、どうやって？
中島 日中は人が多くてできませんから
エキストラ多数も午前1時集合、2時撮
影開始。駅は早朝シャッターが物凄い音
でガーンと開くと構内へ飛び込んで30
分間で撮りました。駅の撮影許可の条件
がそうでしたから。

石橋 日韓中テレビ制作者フォーラムで、
中国から「おじいちゃんを何故死なせる
のか？」と詰問されたそうさ。

前田 私はハッピーエンドのつもりで書
きました。祖父母をみていると人の死に
対しては達観していて、どちらが先にし
んでも「ご苦労様でした」で、人生を全

うして幸せだったという終わりかたです。
渡辺 ラストシーンはおじいちゃんが死
んで何年経ったのかで議論がありました。
10年くらいということにして、おばあち
やんは縁側へ這って行くくらいに老いて
います。

親客から 孫娘は若いままのようでした。

中島 撮影の終わりごろになってあれを
演じている女優の実日子から「事情があ
って髪を切りたいけどいいですか？」と
相談されました。ラストシーンのため
は時間経過がはつきり出ていいと思っ
たので「是非切って」とお願いしたら、思
いがけず若々しくなっていました。

渡辺 喫茶店でブルマンとかキリマンと
か注文するシーンで中島さんは喫茶店の
レジの女の子に「つめたくしないで」と
言いつづけていました。

石橋 そんな優しさがすみずみまでゆき
わたっているドラマでした。

第16回放送人句会

◇平成21年10月7日（水）◇於：表屋

◇出席：伊藤視郎、荻野慶人、豊田ま

つり、新村もとを、橋本きよし、松

尾馬笑、山県ぼん太、西川阿舟

◇不在投句：鶴橋康夫

◇兼題：秋の声、松茸、視聴率

老兵の後ろ姿に秋の声 慶人
松茸や自分の値打ちご存知か 視郎
視聴率わずかに動く暑さかな 康夫

秋風や問ふ人も無き視聴率 ぼん太
松茸敷いて松茸を売るガラス棚 まつり

視聴率汗一滴の重みかな 康夫

養虫鳴けば視聴率下がりけり もとを

韓国へ松茸食ひに行く話 ぼん太

松茸の幟立てたり道の駅 ぼん太

松茸に悲劇の匂い白頭山 慶人

結界に小石置く庭秋の声 きよし

視聴率も流れゆくもの秋の雲 阿舟

松茸や錦小路を香で覆ひ もとを

松茸ぞ先づは一献地酒にて ぼん太

原爆の焼けし瓦に秋の声 視郎

低視聴率に打切り身にぞ入む 阿舟

冷まじや視聴率なるモンスター もとを

秋の空視聴率てふ見えぬもの もとを

視聴率蟻蝻啼く夜に何せんと 康夫

灯を消して無明の闇に秋の声 馬笑

苔色の石を踏みゆき秋の声 きよし

視聴率アステリスクや秋の星 馬笑

レイティング一報届く

秋刀魚焼く まつり

戸障子に夕日の名残り秋の声 きよし

露けしや気になるものは視聴率 阿舟

妻不在テレビは故障秋の声 視郎

松茸にふと口ずさむ

デッカンシヨ 慶人

遠方の朋松茸を持参せり 視郎

土瓶蒸しもはや他人のさし向い まつり

次回放送人句会

12月9日（水）午後6時半〜

於：表屋 (Fax 03-3586-0056)

兼題：師走、着ぶくれ、カメラマン

今回は4人のアナウンサーと放送界入りした異色の学者を紹介します。

まず、武井照子さん。武井さんは一九四四年放送員として入局。放送員とはアナウンサーのことです。出征中の男性に代わり女性が多く採用されました。武井さんの「証言」は空襲下の出勤、猛火の中で焼け残る内幸町放送会館の様相、玉音放送事件、戦後は男性社員の復員で女性職員を退職させようとする方針に対して女子アナたちの抵抗など、波乱にみちた体験や見聞を語ります。占領軍CIEは四五年秋、早くも啓蒙番組「婦人の時間」をスタート。説得力ある低い声を買われ武井さんが抜擢されました。出演は森田たま、神近市子、市川房枝さんら。NBC出身のウォルソンの秒単位の演出が武井さんを驚かせました。五三年、出産をきっかけにディレクターに転身、主に幼児番組を担当し、丁寧語が主流だったこの種の番組に親しみある日常語で語りかけました。日本語の良きリズムを求める武井さんは谷川俊太郎、山本安英さんたちと「言葉遊びの会」の運動もはじめました。

「子山羊の側で見ると狼がやられても残酷じゃないわけですよ、だけど狼の側に光があたって狼が可哀想とはならない、あんなにやられても。だから喋り方はとっても大事だと思う。どこにポイントをあてて喋るか、子供たちがどうとらえているか、ね」

後藤美代子さんはテレビ開局直後の五三年入局でカメラテストもありました。五六年担当したイタリアオペラの中継からはじまった「オペラアワー」

は以後三十年も続くこととなります。

後藤さんの「証言」は当時の局内外で支配的だった女子アナに対する仕事上の差別について多く語ります。結婚、出産、ご主人の転勤などをきっかけに暗に陽に退職を勧告されました。やめて行く先輩後輩の間で誰かが頑張っている年まで働き続けねばならないという思いがあり、それを実現したのが後藤さんだったのです。数々担当した歌舞伎中継も最初は男性独占でした。後藤さんは芸術番組を専門に担当、戸板康二、池田弥三郎、立川澄人さんたちの思い出が懐かしく語られます。鼻濁音の問題、敬語の使い方、アナウンサー今昔などの話題も興味を惹きます。

「外から女性にもニュースを読ませたらどうか、という声があり、昭和五〇年代にNHKも女性のキャスターとしてニュースを読むようになりました」

山川静夫さんは五六年NHK入局、以来無遅刻、無欠勤。三八年間アナウンサー一筋で通しました。初の任地は青森。仙台、大阪を経てAKKに転じ、七〇年から二年間週五回帯の生放送「昼のプレゼント」を担当します。

セットは積み木だけで松原敏春、喰始さんら「ゲバゲバ90分」の作家たちや技術、美術、制作、アナウンサーも含めみんなが肩を組み、意外性の生々しさを追求した番組は山川さんにとっても忘れられないものです。七四年から「紅白歌合戦」の司会を九年間担当、紅白論議や制作の裏表が率直に語られますが、「証言」の中心は七八年から担当した「ウルトラアイ」です。

(1)何を言っても笑わない。(2)やってみなきゃ分からない。(3)みんなやればこわくない、の三原則をモットーにしたポピュラーサイエンス

の番組は、「昼のプレゼント」で得た番組作りが役立ちました。その後の「ためしてガッテン」に引き継がれ、健康食品がテーマの優しい科学番組の先鞭をつけたものです。

「アナウンサーはね、案外勉強しているいくんですよ。するとね、知ったかぶるんですね。だけどね、やっぱりインタビュウのね、鉄則はね、知ったかぶるな、たかぶるな、同じぶるなら阿呆ぶれて。都々逸風ですけれどね、これにとどめを刺しますね」

井上和子さんは五三年一月、デパート勤務を経てラジオ九州(現RKB毎日放送)に入社。民放のアナウンサーは言葉で語るように、「皆さん」でなく「あなた」と呼びかけなさいと教えられました。五八年テレビ開局、顔出してCMを担当する機会が増えます。五九年フリーになり上京、六四年栗原玲児さんの推薦で「木島則夫モーニングショー」の三人の司会者の一人に選ばれます。井上さんの「証言」は当然「モーニングショー」の話題が中心です。既に採録した浅田孝彦プロデューサーの「証言」もありますが、この番組はテレビ制作史の一種の革命、テレビの本質の発見とも言えるものでした。井上さんは主婦、母親の立場からの発言、インタビュウ、CMを担当、CMは殆どナマで原稿無し、セールスウーマンでなく、商品を使う生活者の実感で語るのが決まりで「お誕生日おめでとう」のコーナーでは、出演する母子と親近感を持つと出演交渉から関わったと言います。テレビは人間らしい肌合ひにあると語るのです。

「アナウンサーは中の絵を光らせるための額縁である。アナウンサーはよき額縁であれ、と教育されましたが

(中略「モーニングショー」では)あたくしは、ま、半年ぐらいかかったかなあという感じがしますね。うん、今にして思えば、あの頃は何か言うときはもうドキドキしちゃうの……」

最後は放送技術関係者では数少ない「証言」の中でも異色の、通信工学研究者、発明者でもある伊藤豊さんです。伊藤さんは八木秀次博士に憧れて東北大学通信工学科に学び、五四年ラジオ東京(現TBS)に入社、送信部門に所属、五五年マスターでテレビ開局のボタンを押すことになりました。六二年、伊藤さんが作成したTBS技術基準にCBSが驚嘆し、技術部長オブライエン氏の勧めで映画テレビ学会の世界的権威誌「SMPTE」に論文が発表され、数々の賞を受けます。伊藤さんの「証言」ではNECと協力したカラーテレビ改良の内容で詳細に語りますが、理科オンチの筆者にはここに採録整理することは不可能です。七五年元旦、「モーニングジャンボ」での三元中継は伊藤さんが開発したシンクロシステムの改革、ジェインロック作業の省略あつてのことでした。更にはDV、クロマキー、ストロボアクションなど、映像技術の拡張の基本が伊藤さんの好奇心、研究に発しているとはまさにオドロキの一言です。

「小型カメラで、しかもパソコンで編集する今の番組制作手法なんかも、もうプロからほとんどアマチュアの手になってくる可能性がありますし、そういう中で一体プロは何を作っていくべきかみたいなね、それが問われる時代になりますよ」



【あ】青木裕子 赤井朱美 秋田完 秋山豊寛 雨宮望 新井和子 有馬哲夫 石井彰 【い】石井清司 石井ふく子 石高健次
石橋冠 磯野恭子 磯村健二 市岡康子 一色伸夫 伊藤雅浩 井上良介 岩澤敏 【う】上田千秋 碓井広義 歌田勝彦 宇野昭
【え】江口展之 遠藤利男 遠藤ふき子 遠藤雅充 【お】大蔵雄之助 太田敬雄 大西康司 大西文一郎 大原れいこ 大山勝美
大類啓 大脇明 岡弘道 岡崎栄 岡田晋吉 緒方陽一 岡村黎明 小河原正巳 沖野暁 荻野慶人 小田久榮門 織田晃之祐
【か】加賀美幸子 各務孝 片岡敬司 勝部領樹 加藤滋紀 加藤静夫 加藤迪 金沢敏子 兼歳正英 金平茂紀 加納孝夫
川平朝清 上安平冽子 鴨下信一 川口健一 川口幹夫 川竹和夫 河邑厚徳 河村正一 【き】岸田功 北川泰三 北川信 北出晃
北村美憲 北村充史 木村栄文 木村成忠 【く】楠美昌 工藤英博 隈部紀生 【こ】小池勝次郎 河野尚行 児玉清 児玉孝光
児玉久男 後藤和晃 小南武朗 近藤晋 今野勉 【さ】斉藤伸久 斉藤秀夫 斎明寺以玖子 酒井美樹男 寒河江正 坂元良江
桜井均 佐々木彰 佐々木欽三 佐藤秀山 佐藤利明 佐藤年 澤田隆治 沢田隆三 【し】重延浩 重村一 静永純一 嶋田親一
清水満 下重暁子 城菊子 【す】菅野高至 杉澤陽太郎 杉田成道 鈴木昭典 鈴木克明 鈴木典之 鈴木道明 須磨章
【せ】せんぼんよし 【そ】曾根英二 【た】高島秀之 高戸辰一 高橋一郎 高橋啓 滝大作 武本宏一 田澤正稔 田中昭男
田中直人 田原英二 田原茂行 【ち】千葉勉 【つ】露木茂 鶴橋康夫 【と】土居原作郎 堂本暁子 戸田佳太 外崎宏司
富永卓二 豊田由紀子 土門正夫 【な】中崎清栄 中澤忠正 中島僚 中田美知子 永田浩三 長沼士朗 永野敏一 中村敦夫
中村克史 中村季恵 中村耕治 中村敏夫 中村美美子 中山和記 難波秀哉 【に】新村もとを 西ヶ谷秀夫 西川章 二宮文彦
丹羽美之 【の】野崎茂 信井文夫 【は】萩野靖乃 橋本潔 林健嗣 林裕史 原由美子 原田庸之助 【ひ】久野浩平
備前島文夫 【ふ】深町幸男 藤井深 藤井チズ子 藤田晋也 藤久ミネ 【ほ】星田良子 堀川とんこう 【ま】前川英樹
松井泰弘 松尾羊一 松平定知 松前洋一 松本明 松本修 松本国昭 【み】三上義智 水上毅 水野憲一 三村景一 三村千鶴
宮川鏡一 三宅恭次 明神正 【む】村上光一 村上雅通 村上佑二 村田亨 【も】守分寿男 諸橋毅一 【や】八木康夫
矢島良彰 藪内広之 山県昭彦 山崎隆保 山崎裕 山路家子 山田尚 山田良明 大和定次 山根基世 【よ】横沢彪 横山英治
吉澤保 吉永春子 吉村直樹 吉村光夫 【わ】和田智允 渡辺敏史

☆新会員紹介

中村敏夫さん

(フジ・クリエイティブ・コーポレー
ション副社長)

二宮文彦さん

(NHKエンタープライズ制作本部)

◆新刊紹介

「報道局長業務外日誌」

金平茂紀著

折に触れ、いや折りじゃなく速射砲のごとくダイナミックな文体でブログに叩きつけた現代への刻印をまとめ改めて書としたもの。金平ワールドに割拠し、あるいは走り抜ける人物たち、筑紫哲也、米原万里さんなどの面影、グローバルな往還の、「ニュース23」近辺など、俯瞰してながめると教会(放送局)の腐敗を諷刺し、信仰心とはなにかを描いたA・ジッドの「法王廟の抜け穴」の現代メディア版をおもわせる。(1300円 青林工藝社)

◇お知らせ◇

名作の舞台裏 (放送ライブラリー)

「アイシテル」(日本テレビ)

会場 情文ホール(横浜) 6F

12月19日(土) 13:30、16:30

ゲスト 稲森いずみ 板谷由夏

次屋 尚 吉野 洋(演出)

司会 石橋冠

少年殺人というテレビではタブーに近いテーマに挑み、家族の絆とその周辺の深層をえぐり、論議を呼んだ力作。

*会員席は確保してあります。

どうぞお越しください。

編集後記

会員の山路家子さんが幹事会お開きの際、署名を募っていました。何でも玉川上水の脇に道路を建設、樹木にめぐまれ武蔵野の明媚な風光を残す一帯を破壊する暴挙をとめて!

調べてみると、上水の起源は古く17世紀半ばの江戸時代。過密化した江戸市中に多摩川は羽村から四ッ谷の大木戸にいたる上水を建設、江戸の水飢饉を解消しようという大計画だった。たしか俳諧師以前の松尾芭蕉も土木役人として任に当たったという。したがって東ローム層は水を吸収してしまう俗に水喰土で工事は困難を極めた。三田村篤魚の『安松金右衛門記』によれば、松平信綱家臣の安松兄弟は難工事で予算を使い果たし、家を売り自費で完成させたという。その功で玉川姓を授かった(因みに羽村堰に兄弟の銅像がある)。中流は大岡昇平が「武蔵野夫人」で描いた野火止用水から太宰治入水の三鷹界限、枝川は井の頭池に至る。そのあたりは桜など樹木が鬱蒼と繁る景観で都の清流復活事業の対象となっている。発端は中央高速道建設にあった。清流復活と矛盾する工事に踏み切ったのはなぜか。バイパス反対の地元と妥協し迂回道として玉川上水沿いに東八道路とドッキングする代替工事断行で玉川清流地帯は風前の灯火となった。先日の『噂の東京マガジン』(TBS)で取り上げ道路拡幅工事の有り様や地元民の怒りと嘆きを報じていました。